

## いじめ防止のための道徳科授業

～「いじり」が「いじめ」につながるかもしれないことに気付かせる～

大阪市立堀江小学校 浦部 文成

### 1. 主題設定の理由

#### (1) はじめに

平成 27 年 3 月に学習指導要領が一部改訂され、道徳の時間は特別の教科道徳として位置付けられた。その議論の発端の一つにいじめ問題がある。教科書が出来、いじめ問題を扱う頁が設けられ、いじめ問題への対応の充実が図られている。教科書で扱われているいじめの教材では、森田<sup>注1</sup>の「いじめの四層構造」（円の中心に「被害者」、次に「加害者」、そして「聴衆」、「傍観者」）を基に、いじめ防止には「傍観者」がいじめを抑止する方向に働きかけることが重要だという内容がみられる。

このことは確かだが、現在のいじめは多様化しており、四層構造では説明がつかない形態も現れてきている。向井<sup>注2</sup>は「イジリという名のいじめ」を指摘し、「…イジリによってその集団の一員として自己を周囲に顕示し、そこで行われる…イジリコミュニケーションによって、自己肯定感を得ている。…それはイジる者・イジられる者の両方に言える」という。中野<sup>注3</sup>は、いじりは「…新入り時代、…かなり初期に始まっている。そして加害者側は、むしろ『仲間に入れてあげる』行動として、場合によっては『良かれと思って』している」と述べている。

“いじる・いじられる”という関係が、人を自殺に追い込む最悪の事態になり得るという点について、実際にそのような悲惨な事態が起こっているにも関わらず、児童や教職員にもあまり認識されていないと思われる。

#### (2) いじめといじりについて～その親和性～

いじりといじめの違いは以下の通りである。  
いじめとは「当該児童と一定の人間関係にあ

る他の児童が行う、心理的または、物理的な影響を与える行為であり、当該行為の対象となった児童が心身に苦痛を感じるもの」である。いじりの行為的な側面、例えば、ちょっとした失敗を笑う、触れてほしくない事に言及して笑いを取る、言葉の揚げ足取りをする。相手を小突くなどは、心身の苦痛を感じるために「いじめ」である。

いじりとは、漫才のように、いじる側といじられる側が合意の上で、笑いを取るために使われる、相手をからかう、あげつらうなどの一種の手法である。いじりは、テレビ番組等でよく用いられ、面白く、しかも安易にできそうに見えてしまうため、児童も真似をしやすい。

しかし、現実では、学級や職場の関係の中では、立場の強い者（いじる側）から立場の弱い者（いじられる側）への一方的なあげつらいや嘲笑となることが多く、いじられた側の尊厳が傷つけられることになる。また、いじられた本人やいじった側、それを見ていた周囲の人間が人の尊厳を傷つけていることに気付きにくい。大阪は“ぼけ、つつこみ”には寛容な雰囲気があり、加えて、笑いがある、場の雰囲気を壊したくない等で、その場で嫌と言いつづけるのは難しい。また、周りも、ふざけ合っているといった認識でいることが往々にしてある。それだけに、歯止めがかからず、いじりが段々とエスカレートし、気付かないうちにいじめへと発展する危険性を秘めている。

#### (3) 本学級の児童の実態

授業実践する本学級は4学年で、児童は男子21名、女子14名である。本校は95%以上がマンション居住であり、保護者の多様な価値観や生活様式の基に、自分の思いが素直に言えない、

相手のことを考えないなど児童に人間関係の未熟さがみられる。本学級の児童にもその傾向がみられる。

本校は児童数が非常に多く、クラス替えの度に人間関係が一度リセットされる。年度当初、ほとんどの児童は、同じクラスになった友達に対して友好的に接し関係をつくろうとしている。しかし、親しくなりたい気持ちを「友達の名をもじってからかう」で表す児童や、遊びのつもりで「不適切な言い方をする」児童等が見られた。いじられることを期待しているような児童も見られる。

友達との仲が進むにつれて、相手を叩いたり、馬鹿にしたり、追いかけ合いをしたりといった行為の頻度が高く目立つようになってきた。その場で、注意や指導はするが友人関係の在り方に危うさを感じた。QU 調査によれば、孤立している児童も 8 人いた。また、6 月のいじめ調査では「いじめたことがある」0 人、「いじめられたことがある」3 人である。さらに、アンケートによれば、「いじめは絶対許されない」という児童は 94% であるが、自分達のしていることが、ともするといじめにつながるかもしれないということに気付かず、あまり自覚がないように思えたのである。

以上のことから、いじりを基にしたいじめについて考える授業をする必要があると考えた。

## 2. 研究の目的と方法

### (1) 研究の目的

いじりといじめの異同を考えることを通して、児童のいじめに対する認識を深め、いじめに気付き、止めることのできる児童を育てる。

### (2) 研究の方法

教科書資料（「いじりといじめ」：日本文教出版「生きる力 4 年」）を用いて授業を行い、児童の発言やワークシートから児童の意識がど

う変わったか、検証を行う。

### (3) 教材について

本教材はいじりといじめについて考えるためのものである。教材の概略を次に示す。

授業でまさるが的外れなことを言ったので皆から笑われ、まさる本人も笑った。しかし、ゆうきはドキッとす。みかは「今の、笑っていいのかな。」思い切ったように言う。げんきは「おもしろかったんだ。まさるくんは気にしていないよ。間違ってもみんなにうけたんだし、気にするほどじゃあないよ」と反論する…。

登場人物の立場はそれぞれ次のようである。ゆうきの心情には、人をいじっている時にいじられた人のことを考えていない様子が、げんきの言い分にはいじりといじめは違うものであり、自分達は正当だという主張の理由が含まれている。みかの意見は、いじられた人が本当に気にしていないかどうかは分からないことやいじりを見たり、聞いたりした周りの人が不愉快になることがあることを示している。これら 3 人の考え方は、ふだん見過ごしがちな「いじり」や何気なく思っていることに重なるものであり、いじりといじめについて考える手掛かりとなる。この教材と、自分達の普段の言動を重ね合わせることで、いじりといじめについて考えることができるようにしたい。

## 3. 実践の概要

### (1) 実践の日時・学級等

平成 30 年 6 月 19 日（火） 4 年 1 組 児童 35 名

### (2) 指導案

#### ①目標

いじりといじめの違いを考えることを通して、「いじり」は人の尊厳を傷つける行為であり、「いじめ」と同義であることに気付き、してはならないことであるという意識を高めることができる。

## ② 評価（ルーブリック）

A	「いじり」と「いじめ」が近いものであることに気付くしなくてはならないという意識で見かけたら止める気持ちを持つ。
B	「いじり」と「いじめ」が近いことに気づき「いじり」をしないという気持ちを持つことができる。
C	「いじり」と「いじめ」が近いことに気が付かない。

## ③本時の展開（全1時間）

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点及び支援
<b>1.</b> バラエティ番組の映像を見せる。 (全体)	○この映像を見て、どう思いますか。 ・芸人がいじられている ・ちょっとかわいそう ・面白い。	・この段階では、どのような反応も許容する。素直に思っていることを出させる。 ・IWBを使用して映像を見せる。
<b>2.</b> 教科書の範読を聞く。 (全体)		
<b>3.</b> 「いじりといじめのちがい」を読んで、3人の考えについて話し合う。 (個人→2グループ)	○みかさんは何を問題だと考えていますか ・まさるの失敗を笑ったこと。 ・まさるがほんとうに気にしていないのか。 ・笑うことはよくないこと。	・人の失敗を笑ってよいかということが問題になっていることを話し合う中で確認する。
<b>①</b> みかの考えについて	○まさるくんを笑うことはいじめですか。それともいじりですか。 <b>【いじめ】</b> ・まさるは傷ついている。 ・みんなで笑っている。 ・まさるががまんしているだけ。 ・まわりも嫌な気持ちになる。	・三人の発言を比較する中で、げんきの発言はまさる本人の気持ちを見落としている点に気付かせる。
<b>②</b> げんきとゆうきの考えについて	<b>【いじり】</b> ・友達同士だから問題ない。 ・冗談だとわかっている。 ・面白いから良い。 ・本当に傷ついていたらいじめ。	・面白いかどうかではなく、いじられた側がどう感じるのかが問題であることに問い返しや友達の発言につなげる中で気づかせていく。
<b>4.</b> いじりといじめの違いについて話し合う。 (班→全体)	○いじめにならないいじりはあるかな <b>【ある】</b> ・1対1なら良い。 ・仲よし同士なら良い。 ・相手も笑っていたら良い。 <b>【ない】</b> ・どちらにしてもされた方は嫌。 ・仲が良いかどうかは問題ではない。 ・嫌でも言えない時がある。 ・笑っていても心の中では嫌だと思っている時がある。	・色々な場面で考えさせることで考えをより確かなものにする。 ・仲の良さや信頼関係の有無が問題ではなく、人の尊厳を傷つけていることが問題であることに気付かせる。 ・いじめにならないいじりが出ない場合は教師の側から提示し、児童に揺さぶりをかける。
<b>5.</b> 考えたことを発表する。 (全体)	○いじめといじりはどこが違うのだろう。 ○いじめにならないために、どんなことに気を付ければよいのだろう。	1対1、仲よし同士、周りが明るくなる、相手も笑っている、相手が軽く受け流せる、相手が言い返せる・・・いじり

### (3) 授業の実際

#### 【導入場面】

導入として、バラエティ番組の「ロンドンハーツ」の映像から芸人がいじられている場面を視聴させた。児童の反応に対しては、指導や同調などしないようにした。「嫌がっている」「しつこい」等の意見に8割同調する児童が程の児童が頷いていたが、「面白かったのでは？」という問いかけには半数以上の児童が面白いと感じていた。

#### 【「いじりといじめのちがいを」を読んで、3人の考えについて話し合う場面】

教科書の場面を確認した後、児童に「この場面はいじりか、それともいじめか」と問いかけ、隣同士で相談し、自分の考えを発表させた。当初、8割程度の児童がいじりだと考えていた。その理由として、直接的に暴力を加えたわけではないこと、それをした回数が問題であり、回数が増えていけばいじめになるということ、本人が笑っており嫌がっているようには見えないということ等をあげていた。

#### ▼ 授業の一場面①（抜粋）

T：じゃあ、いじりの方の人。C1さん。

C1：冗談だって分かってやっている。

T：分かってしてるというC1さんの意見だけど、C2さんは、つけたしとかどう？

C2：いじめは何回も同じようなことをやられて、もっと蹴られたりするのがいじめだけど、いじりは、自分も皆が笑っていて、心の中がそんなに傷ついてないと思うし、蹴ったりはしてない。いじめよりも、もうちょつと軽いものだから、いじりだと思います。

C3：C2さんに似ていて、こそつと集まってしゃべったり、傷ついたり、やめてほしいことを何回れされることはいじめだけど、嫌がっているとか、やめてとか言っていないのでいじりだと思う。

.....

T：いじり派の人の意見をまとめて言うと、どうなるのかな。

C4：分かってしてる、暴力をしていないので、いじり。

T：いじりの方のさんは、どんなことをしたらいじめになると思ってるの？

C5：心が傷ついたり、やめてと言っても何回も嫌なことをする。

一方、5人の児童は、いじめだととらえていた。その理由として「人の失敗を笑うのはいけない」というものであった。両者に分かれて、討論をさせた。

まず、「いじり」側の児童は、次の児童の発言にもあるように、分かってやっている、暴力をしていない、本人も笑っているので傷ついていないということを理由にあげていた。

一方で、いじめだと捉えた児童は、以下の授業場面②の発言にもあるように、まさるが嫌がっているかもしれないこと、言葉の暴力もいじめになるということ、回数が問題になるわけではないということ、わざと間違ったと思っているのは周りの人だけで、まさるにはそのつもりがなかったことなどを理由に挙げていた。

#### ▼ 授業の一場面②（抜粋）

T：分かってしている、嫌だと言っていない、暴力じゃないので、いじめじゃないといういじり派の意見について、いじめ派の人はどう思う。反論は？

C6：げんきくんとかは、普段から まさるくんは面白い子なんだって思っているから、そうやってわざとまちがえたんだと思っているだけ

.....

C7：嫌がったら笑わないというけど、嫌がりすぎて、隠すように笑ったと思います。

C8：無理やり笑って、自分が嫌じゃないって、みんなに……。気を使ってると思う。

.....

C9：気にする程ではないと書いてあるけど、自分がされたら嫌なのに、まさるくんの本当の気持ちとかは分からない。

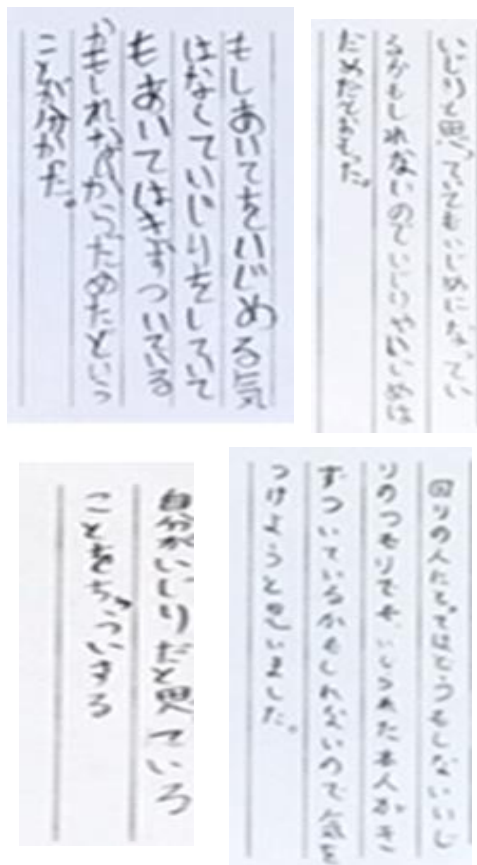
C10：うつむいているし、自分は笑われたりするの嫌なんだけど、それをまさるくんも嫌なのと一緒に思う。

C11：自分の立場ではわからないけれども、まさるくんの気持ちでは、たぶん、嫌がっていると思う。

「(まさるが) 笑いをとろうとしてわざと間違えたわけではなくて本当に分からなかった」「ほんとに嫌だったのでは」といったいじめだと考え児童の意見を聞いて、いじり側の児童は大いに悩んだように見えた。いじりだと考える立場から反論をしたが、いつの間にかいじめだと考えるようになっていく児童もいた。

児童の書いたワークシート(図1)を見ると、いじりといじめを同一線上に捉え、どちらも相手の気持ちを考えることが大切であると考えた児童が29名いた。しかし、いじりといじめを対極にあるものと捉える児童も6名いた。相手が自分をいじって、自分もいじられて楽しむといった、「いじり」が一種のコミュニケーション手段として認知されている昨今の状況を考えると、相手させよければ多少の「いじり」はしてもいいという考えを変えなかったことも児童の素直な気持ちだろう。いずれにしても、「相手の気持ち」を考えることが大切であるという点は十分に理解されていると考える。

#### ▼図1 授業後の児童の感想(ワークシートから)



この教材を学習した後に、いじめ調査の「いじめたことがある」、「いじめられたことがある」という回答があることをもとに、自分はいじめしていないと思っていても、相手が不快で「いじめられた」と思う場合があることについて考えさせた。児童の発言から、自分は「いじめてやろう」と思っていないで、楽しそうとか、よく考えないで言ったりしたりしたことが、相手を傷つけて、そこから言い合いになったなどという経験がほとんどだった。

相手はいじめたと思っていないくとも、自分が嫌な思いをした場合に、勇気を持ってそのことを言う、自分はいじめるつもりはなくとも、相手がそう思う場合がある。その場合に、人から責められて自分は「いじめるつもりなんかない」と納得できなかった自分を振り返って、「やっぱり、謝らないといけない」という感想を言う児童もいた。

#### (4) ワークシートの記述やアンケート結果

ワークシートの記述内容では、例えば、「これからは、いじりだと思っても人が嫌な思いをするようなことはやめる」「自分が、気が付かないでしてしまったら、素直に謝る」といった、今後の自分の言動に関する内容は、多い少ないはあるもののどの児童の記述にも含まれていた。また「自分と相手の受け取り方は違う。だから、気を付ける」といった内容の記述も、約38%の児童にみられた。

ワークシートの振り返り欄では、「しっかり考えた」が53%、「新しく気付いたことがあった」が66%、「これから大切にしないといけないことが分かった」が50%であった。

授業中の児童の発言も含めて検討すると、「いじり」と「いじめ」を考えることで、いじめに対する認識が深まったと考える。

#### 4. 成果と課題

##### 【成果】

- ・児童の8割ははじめ、いじめは身体的暴力と頻度が問題であると考えていたが、最終的に

は、ほぼ全員が被害者の気持ちが問題であることに気付くことが出来た。

- ・いじりといじめの関連性を考えることによって、教員が自分の生活に引き付けて考えるように促さなくとも、自分との関わりの中で考えることが出来た。
- ・いじりといじめの違いを考えることを通して、自分がいじりだと思ってしていることが、いじめになるかもしれないという可能性に気付かせることが出来た。

#### 【課題】

- ・いじりといじめがどう違うのかという話し合いよりは、どのような点が似ているのかを話し合ってもよかったのかもしれない。そうすることで、いじりといじめの親和性により気付くことができたかもしれない。また、人間の尊厳についても、もっと触れる場があってもよかった。
- ・この学習は一つの点であり、それを線にし、立体にしていく実践が、学習内容を日常に生かし、集団育成につながると考える。そういった学習の連続性を今後、検討していきたい。

#### 【引用・参考文献】

注1) 森田洋司 (2010) 「いじめとは何か―教室の問題、社会の問題」

注2) 向井学 (2010) 「いじめの社会理論」の射程と変容するコミュニケーション

注3) 中野円佳 (2018) 「上司の『いじり』が許せない」